# 文化庁月報

No.436
2005年 1 月号


## CONTENTS


文化人の本音　河合隼雄文化庁長官対談　第34回　ゲスト 中村鴈治郎さん●歌舞伎俳優
**舞台芸術はお客様と一体となってこその芸術**……4
長官コラム　文化庁の抜穴……9

**特集 日本と韓国の芸術文化交流**

文化庁提言
**新しい日韓文化交流時代に向けて**……池原充洋・10

寄稿
**『日韓文化交流』からアジアの文化交流へ**……姜　誠・12
**日韓協同時代に向けて**……平田オリザ・13

事例紹介
**日韓芸能交流公演**
**スーパー神楽とコリアンファンタジー**……国際課・14
**日本映画：愛と青春　一九六五―一九九八**……芸術文化課・15
**第二回国際文化フォーラム**……国際課・18

取組紹介
**二〇〇四・二〇〇五年の日韓文化交流への文化庁の取組**……国際課・21

連載
いきいきミュージアム　美術館・博物館事業レポート㉔
葛飾区郷土と天文の博物館(東京都)……22
芸術文化の活動風景⑩
小波則夫(琉球結髪)……23
そうかこうすればいいんだ！著作権教育実践事例⑩
日常性がモノを言う……24
文化交流使の活動報告⑩
杉本　洋(日本画家)……25
伝建地区を見守る人々　伝建歳時記⑩
大内宿と雪まつり(福島県下郷町)……26
遺跡を楽しむ⑩
史跡づくりをサポートする発掘ボランティア……28
文化庁の地域文化振興施策⑩
伝統文化こども教室事業……29
国語研究の最先端⑩
海外における日本語学習の実態をとらえる……30
風を呼ぼう，わが町に　登録文化財との歩み⑩
普賢岳の麓の町　島原の歴史的建造物とまちづくり…31
文化力ニュースfrom関西　関西元気文化圏の特色ある取組⑩
形も中身もオンリーワン……32
国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法―文化財鑑賞の手引き―㉒
銅鐸のみかた……33
日本の伝統美と技を守る人々　選定保存技術保存団体編④
歌舞伎衣裳製作修理(歌舞伎衣裳製作修理技術保存会)……34

文化庁ニュース
芸術系大学長と文化庁長官の懇談会を開催……35
世界の文化遺産保護の新たな取組の始まり……36
みんなで守ろう文化財　第51回文化財防火デー……38
公益信託大成建設自然・歴史環境基金平成16年度助成先決定……39

イベント案内
東京国立博物館
金堂平成大修理記念 唐招提寺展　国宝鑑真和上像と盧舎那仏……40
京都国立博物館
特集陳列　伊藤若冲……41
2台のチェンバロが奏でるバロックの饗宴……41
奈良国立博物館
特別陳列　お水取り……42
京都国立近代美術館
河井寛次郎展……43
国立国際美術館
企画展　オノデラユキ写真展……44

新国立劇場スポットライト……45
2月の国立劇場……46
芸術文化振興基金ニュース……47


今月の表紙

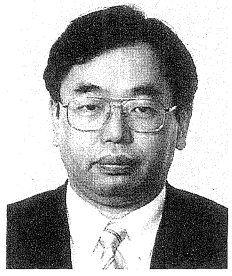
表紙使用写真(左上から)

カタログ表紙デザイン：神崎愛子
『突然、嵐のように』©1977松竹
『いちご同盟』©トライアーツ／シネカノン
『時をかける少女』©1983角川映画
『狂った果実』©日活
『SO WHAT』©ステューディオスリー
『海鳴り（集団痴漢 人妻覗き』©国映
『あこがれ』©1966東宝
『爆発！暴走遊戯』©東映
『ウェルター』©スカイコーポレーション
『高校生心中　純愛』©1971角川映画
『やくざ絶唱』©1970角川映画
『愛の新世界　Le Nouveau Monde Amoureux』
©1994ジー・カンパニー／東亜興行


題字デザイン　桑山弥三郎

文化庁提言

# 新しい日韓文化交流時代に向けて



長官官房国際課長
池原充洋

## 1 日韓文化交流の進展

二〇〇二年のサッカーワールドカップ大会の日韓共同開催と、同年にさまざまな交流事業を実施した「日韓国民交流年」以降、我が国と韓国との間の文化交流は加速度的な深まりを見せています。そして、二〇〇四年一月には韓国政府による第四次日本文化開放が実施され、日本の映画・ビデオ作品、レコード・CD、ゲームソフトが全面的に開放になりました。また、劇場用アニメーションは二〇〇六年一月から開放されることが約束されました。この措置により、放送分野におけるドラマや娯楽番組を除き、韓国において日本の大衆文化がほぼ全面的に開放されました。

## 2 我が国における韓流の動き

我が国においても『シュリ』『JSA』といった韓国映画が観客を呼び、またBoAなど韓国の歌手が人気を博して、韓国の映画や音楽が我が国で定着しつつあります。さらに二〇〇四年は、韓国のテレビドラマ『冬のソナタ』の大ヒットにより「韓流」が社会現象となり、日本の幅広い層に食や生活様式を含めた韓国文化に対する認識・関心が深まりました。

この「韓流」ブームが、日韓交流の進展と韓国における日本文化の開放に呼応するかのように、同時性をもって日本に到来したことは、注目に値すると考えています。もちろん、「韓流」ブームはこれまでの日韓交流の蓄積の成果としてさまざまな要因によりもたらされたものですが、特に第四次日本文化開放により、韓国が日本大衆文化に門戸を開いたことが、多分に無意識的であるにせよ、日本においても韓国大衆文化を積極的に受け入れようという機運を生み、それが、今日のブームの下地となったと言えるのではないでしょうか。このように、両国の人々がお互いの国の文化全般に好感をもって接しはじめたことが明示的に表れた二〇〇四年は、両国の交流にとって、特筆すべき一年であったと思います。

## 3 日韓友情年二〇〇五

本年は、日韓の国交正常化四〇周年を記念して、両国政府首脳が両国の友情と相互理解を深める機会として、「日韓友情年」を決定し、官民をあげて、各種交流事業や文化紹介事業を行うこととされています。

文化庁としても、二〇〇四年一月の韓国における第四次日本文化開放、二〇〇五年の日韓友情年の実施を受けて、従来の交流から一歩進めて、お互いの文化芸術を紹介し合うだけでなく、公演や展示、ワークショップなどを通じて両国の文化関係団体、芸術家、クリエーター、プロデューサーの出会いの機会をつくり、長期的な視点に立って人材育成の協力を引き出す呼び水となるような交流事業を実施・計画しているところです。

昨年は、三月に韓国の商業ベースでは紹介されにくい作品を我が国に紹介する「韓国インディペンデント映画二〇〇四」の開催をはじめ、四月の「日韓芸能交流公演　スーパー神楽とコリアンファンタジー」や、「日本インディペンデント映画特集」「日韓映画クリエーターワークショップ」（全州国際映画祭の中のプログラム）、一〇月に「チルソクの夏プレミア上映会」（ソウル）、一一月に我が国の娯楽映画を韓国に紹介する「日本映画：愛と青春一九六五―一九九八」を開催したほか、文化庁主催「第二回国際文化フォーラム」において、日韓両国の学生による意見交換の実施や、若手文化人・芸術家が議論する座談会などを実施しました。

本年は、我が国の芸術団体の派遣公演や、日本と韓国の芸術家・芸術団体の共同制作による公演に対する支援をはじめ、日韓友情年のオープニングイベントとして、二〇〇三年にともにユネスコの『人類の口承及び無形遺産に関する傑作の宣言』として宣言をうけた「人形浄瑠璃文楽とパンソリの交流公演」や、第八回文化庁メディア芸術祭の中で、「韓国メディア芸術作品展」「日韓メディア芸術祭学生ワークショップ」を開催するほか、昨年に引き続き「日本映画祭（仮称）」「韓国インディペンデント映画二〇〇五」「日韓芸術系大学交流美術展」など映画やメディア芸術などの新しい分野の交流事業を企画しています。

## 4 これからの日韓交流

文化庁としては、外務省等関係省庁とも連携して、今後とも、文化芸術の交流を通じて両国のさらなる友情と相互理解の促進に努めることとしています。また、二〇〇四年の韓流ブームが一過性のものとならず、真の隣国として、互いに身近な存在となりうるよう、さまざまな交流が永続的に続いていくことが、本年の日韓友情年としての大きな意義の一つだと考えております。本年が我が国と韓国にとって、よりよい年になるとともに、皆様方にとってもすばらしい年になることを祈念して止みません。

# 『日韓文化交流』からアジアの文化交流へ

ルポライター
姜　誠

冬ソナ人気がとどまることを知りません。韓流スターの人気も高まる一方で、先のヨン様来日では追っかけファンが将棋倒しとなり、一〇人ものケガ人が出てしまったほどです。

いったい、この韓流ブームをどう考えればいいのか？　これまで日韓文化交流を取材してきたこともあって、こう質問される機会が最近、めっきり多くなってきました。

そんな時、私はこう答えることにしています。

「ブームの要因？　わかりません。こっちが教えてもらいたいくらいです。ただ、一つだけ言えることがあります。それはこの韓流ブームは韓国にとってトランキライザー（精神安定剤）の役目を果たしてくれたということです」

これまで、日韓の文化交流はお世辞にも双方向とは呼べませんでした。日本の文化コンテンツはどんどん韓国へ流入しているのに、韓国の文化コンテンツは日本では見向きもされない時代が長く続いてきました。

例えば、ＳＥＳという韓国出身の美少女三人組のユニットがいたことをご記憶でしょうか。小渕首相と金大中大統領が首脳会談を行い、日本の大衆文化開放が合意されたのは九八年一〇月のことでした。ＳＥＳは「これからは双方向性の文化交流になる」と踏んだ韓国側が満を持して日本へ送り込んだ期待の大型ユニットだったのです。

六本木の巨大ディスコを借り切って開かれた日本デビューコンサートに私も立会いましたが、スタッフの言動の端々に「韓国の大衆文化を日本人にも楽しんでもらいたい」という強い意気込みをひしひしと感じたものです。

しかし、ＳＥＳは結局、ブレイクできず、二年ほど活動して日本の音楽シーンから姿を消してしまいました。

当事、韓国の音楽関係者とこの話題になると、「せっかくいいタマを持って行っても受け入れられない。日本は韓国に無関心すぎる！」と、プリプリ怒っていたのを思い出します。

あれから六年。いまでは韓国映画をはじめ、韓国の文化コンテンツは確実に日本のファンに受け入れられています。音楽シーンでもＢｏＡという韓国出身のシンガーが三回も紅白歌合戦に出場するまでになりました。

こうした韓流ブームの頂点として冬ソナブームがあるのです。おかげで、いまでは日韓の文化交流が一方通行だとヒステリックに怒る韓国人はほとんどいなくなりました。日本の文化コンテンツが国内に流入することへの異論も聞こえません。先に文化庁がソウルで開いた「日本映画・愛と青春　一九六五―一九九八」の催しも延べ一万六〇〇〇人もの韓国人観客が押しかけ、大盛況でした。

その意味で、この韓流ブームは韓国にとって、日本文化受容のトランキライザーの役目を果たしてくれたのです。本当によい時代になったものです。後はこの日韓文化交流が将来、東北アジアという域内を生み出すステップになってくれれば、もっとうれしい。文化にはそれだけの力があると思うのです。





# 日韓協同時代に向けて

劇作家・演出家
桜美林大学助教授
平田オリザ

二〇〇四年の秋から冬にかけて、韓国の演劇街大学路では、日本の戯曲が五本上演された。いずれも韓国の演出家、俳優たちによる通常の興業としての公演である。数年前まで、日本の戯曲を上演するといえば、友好親善のためのイベント的なものが年に一本程度だったことを思えば、大きな変化である。

すさまじい韓流ブームの影に隠れてはいるが、韓国における日本理解、日本文化の受け入れの形も、多様性をもって広がっている。

私自身、二〇〇四年の秋は、韓国の劇団ＰＡＲＫとの合同公演を行った。私の代表作の一つ『東京ノート』がソウルで、韓国を舞台にした翻案作品『ソウルノート』として、二〇〇三年の春に上演された。その公演が好評で、〇四年秋のソウル公演芸術祭に、私の劇団青年団との合同公演として参加することになったのだ。俳優は日本から七名、韓国から一一名が参加。一〇月の上演は、楽日には通路や桟敷席にも人があふれるほどの盛況となった。

二〇〇二年には、ワールドカップ共催の記念事業として、日韓の国立劇場の共同制作で合同公演を行った。こちらは、私が日本側の作・演出を担当、韓国側からも作家、演出家がそれぞれ出て、俳優も日本人が六人、韓国人が五人。この、はじめての本格的な日韓共同作品『その河をこえて、五月』は、日本側では朝日舞台芸術賞グランプリ、韓国側では「評論家が選ぶベスト3」賞を同時受賞するという画期的な成果を収めた。この作品は、二〇〇五年五月に再演、その後日本国内を全国公演する他、ソウルでも再び上演される。

このように、すでに演劇の世界では、日韓交流は、友好親善のための交歓の域を越えて、協同作業の中から、具体的にどんな成果を出すかという時代に入ってきている。

実際、二〇〇四年のソウル公演芸術祭の際の契約条項の中には、この『ソウルノート』が、海外のフェスティバルに招請されたときの取り決めなどが盛り込まれていた。別にこれは、私がお願いしたわけではなく、韓国側が自発的に提案してきたものだ。欧米の市場を視野に入れて、日韓が合同で作品を創る時代がきたのである。

先般、香港から、『その河をこえて、五月』と同じような枠組みで、香港で作品を創れないかと打診がきた。日韓の協同作業が、アジアの文化交流の、成功の一つのひな形にもなった。

大きな視野で見れば、日韓の和解の道程は、まだまだ完結したとは言い難い。しかし、いま私たちが行っている文化の共同作業の道筋は、日韓の関係だけにとどまらない波及効果ももっているのではないか。やがて、インドとパキスタンが、パレスチナとイスラエルが、あるいはバルカン半島に住む人々が、和解の道筋をたどる際に、やはり芸術文化は大きな力を発揮するだろう。そのとき、私たちがいま成し遂げようとしている営みは、きっと彼の地の芸術家たちの希望の灯火となるだろう。

事例紹介

# 日韓芸能交流公演 スーパー神楽とコリアンファンタジー

長官官房国際課

## 1 公演の趣旨・経緯

二〇〇二年ワールドカップ・サッカー大会の日韓共催および同年に実施された「日韓国民交流年」を契機として、日韓両国の文化交流は着実に進んできています。また、二〇〇四年一月には、韓国政府による第四次日本文化開放が実施され、韓国において日本文化がほぼ解禁されました。

本公演は、このような日韓交流の進展を受けて、両国の国立劇場による初の交流公演として、二〇〇四年四月に（独）日本芸術文化振興会が運営する国立劇場大劇場で二日間にわたって開催されたものです（文化庁・韓国大使館韓国文化院の共催）。

## 2 具体的内容

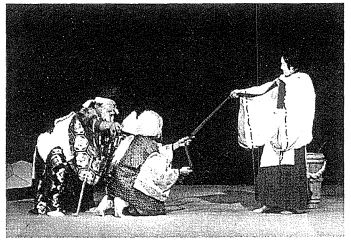
本公演は韓国の宮中舞踊や民俗芸能、そして日本の民族芸能を同一の舞台で上演する初めての試みとして行われました。

韓国からは、国立舞踊団（大韓民国国立中央劇場所属）が招聘されました。国立舞踊団は、世界各地での舞台経験や最高の技量をもった団員で構成され、一九六二年創立以後、民族情緒が盛り込まれた豊かなレパートリーで、韓国の舞の固有の粋と美を広く伝えています。本公演では、『扇の舞』『東莱鶴舞』『珍島カンガンスルレ』『サルプリ』『チャンゴ踊』『五鼓舞／三鼓舞』が披露され、優雅な舞から集団舞踊、ダイナミックで躍動感あふれる舞踊など、さまざまな要素を備える韓国舞踊を紹介しました。

また、日本からは、古来より神楽どころとして知られている広島県より、中川戸神楽団・山王神楽団が出演しました。スーパー神楽とは、戦後流行したテンポの早い神楽をより一層現代的演出を加味し、ダイナミックに華やかに見せる神楽で、数ある演目の中から代表的な『八岐大蛇』を上演し、過去と現代が融合した舞を披露しました。

本公演は日韓の芸能が同一の舞台で上演される交流公演として観客に日韓間の文化交流の進展を印象付けるとともに、日韓の芸能の同質性と対照性を目の当たりにする新鮮な感動を与えました。

コリアンファンタジー
『扇の舞』（プチェ　チュム）
韓国の民間信仰である巫俗で用いられる扇に触発され，1940年代に崔承喜によってつくられた舞。



スーパー神楽『八岐大蛇』
足名椎（あしなづち・じじ），手名椎（てなづち・ばば）と奇稲田姫（くしなだひめ・娘）の親子別れの場面



事例紹介

# 日本映画：愛と青春　一九六五―一九九八

文化部芸術文化課

## 1 企画の趣旨・経緯

映画はあらゆる文化芸術を包括する総合芸術であり、国民に幅広く親しまれています。また、ときにはそれぞれの文化を映す鏡であるとも言われています。

映画に親しむことで、制作された国の語学の習得、食への注目、あるいはファッションなど、文化への親しみの深化が生じ、その国の人々を等身大で見つめることにもつながります。

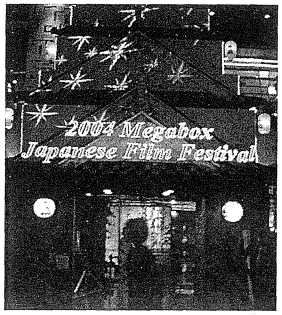
本企画は、本年の日韓国交正常化四〇周年や、「日韓友情年」と名づけられたその記念すべき扉を開ける序章として、映画のもつ文化訴求力を活用し、日韓両国の相互理解を促進させるものです。

その皮切りとして、二〇〇四年一月に行われた韓国政府の「第四次大衆文化開放」に呼応するかたちで、同年三月には東京（渋谷）で「韓国インディペンデント映画二〇〇四」を開催し、商業ベースでは公開されにくい優秀な作品を多数紹介しました。この「日本映画：愛と青春　一九六五―一九九八」はそれに続く催しです。

## 2 本企画における上映作品の選定

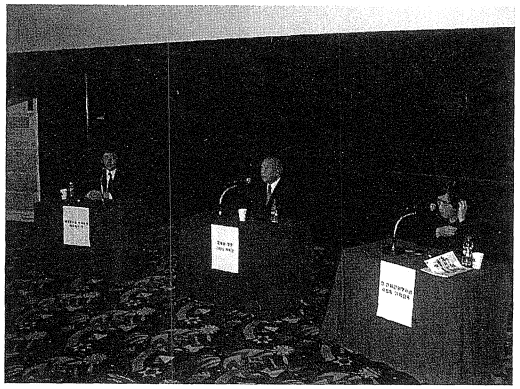
日本映画の選定については、まず、観客であるファンの意向を反映させるために、日本で最も歴史の古い有力映画雑誌の「キネマ旬報」を通じて読者に呼びかけ、「日本の映画ファンが韓国の映画ファンに見てほしい日本映画」の推薦を募りました。

推薦された膨大な作品の中で、次のような




会場となったメガボックスの外観

メガボックスの入口



右から，イ・チャンドン監督，河合文化庁長官，司会の寺脇文化部長

基準を設けました。時代的には、一九六五年から一九九八年の間に製作公開された作品に限りました。一九六五年は、日韓条約が締結されて国交を回復した年で、一九九八年は、韓国で日本映画（四大国際映画祭受賞作）が開放された「第一次大衆文化開放」年にあたります。この間、国交が回復しているにもかかわらず、韓国で日本映画の上映が禁じられていたことを鑑み、今回をきっかけにまとめて見てもらおうと試みました。

一九六五年から一九九八年という期間は、現代史の上では、高度経済成長をなしとげ、経済的繁栄を謳歌した絶頂期からバブル期を経てバブル崩壊へ至る三〇年であり、労使闘争や学園紛争が多発した左右両翼の政治勢力が対立する状況から、冷戦構造が崩壊してその対立を無意味にする三〇年でもあります。

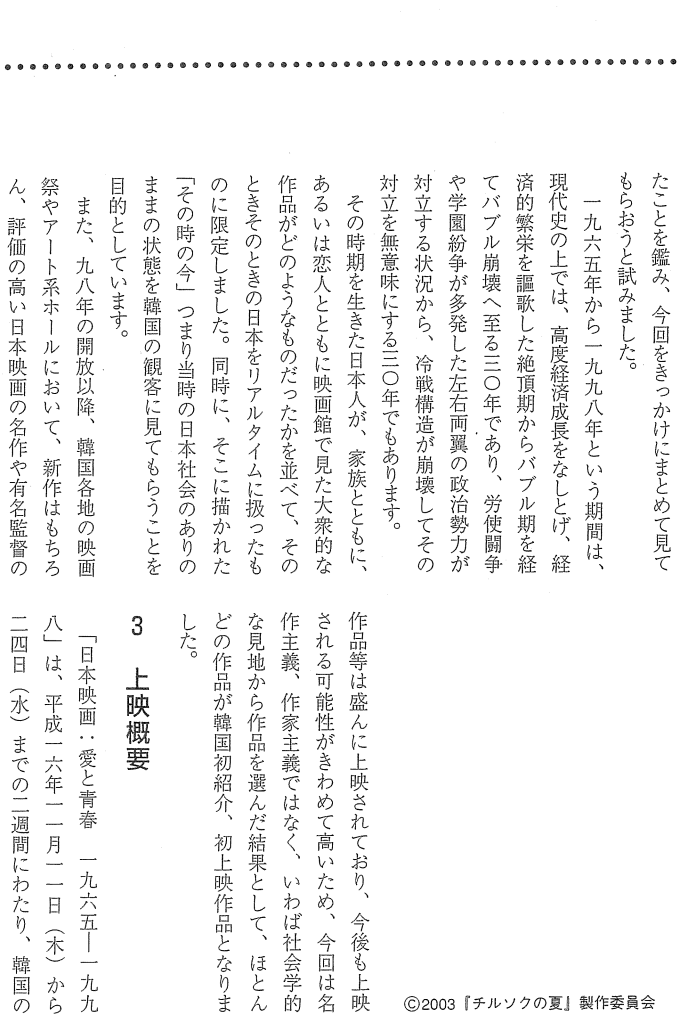
その時期を生きた日本人が、家族とともに、あるいは恋人とともに映画館で見た大衆的な作品がどのようなものだったかを並べて、そのときそのときの日本をリアルタイムに扱ったものに限定しました。同時に、そこに描かれた「その時の今」つまり当時の日本社会のありのままの状態を韓国の観客に見てもらうことを目的としています。

また、九八年の開放以降、韓国各地の映画祭やアート系ホールにおいて、新作はもちろん、評価の高い日本映画の名作や有名監督の作品等は盛んに上映されており、今後も上映される可能性がきわめて高いため、今回は名作主義、作家主義ではなく、いわば社会学的な見地から作品を選んだ結果として、ほとんどの作品が韓国初紹介、初上映作品となりました。

## 3 上映概要

「日本映画：愛と青春　一九六五―一九九八」は、平成一六年一一月一一日（木）から二四日（水）までの二週間にわたり、韓国のメガボックスで実施されました。作品数は全部で四六本、そのうち四四本は日本映画の上映が韓国で禁止されていた時期（一九六五から一九九八年）の作品で、残りの二本が一九九八年以降の作品です。

上映については、延べ一三六回行われ、わずか二週間という期間にもかかわらず、約一万六〇〇〇人、平均座席専有率は約七五％を記録し、二二作品（三一回）が満席を記録するなど、韓国の映画ファンの日本映画への関心の高さをうかがわせる結果となりました。


©2003『チルソクの夏』製作委員会


©2003『ヴァイブレータ』製作委員会



## 4 シンポジウム等の開催

本企画の一環として、河合隼雄文化庁長官とイ・チャンドン前韓国文化観光部長官による特別対談「日韓文化交流の未来」が行われたほか、日韓の映画カメラマン、シナリオ作家等が参加する三つのシンポジウムが開催され、両国の映画関係者等にとって有意義な意見交換の場を設けることができました。

特に、「日韓文化交流の未来」については、韓国各紙で報道され、映画雑誌でも見開きの特集が組まれるなど、韓国内において関心の高い催しとなりました。

## 5 韓国内での報道

期間中、本企画に関して韓国内の新聞、雑誌、テレビ等で数多くの報道がなされました。具体的には、次のとおりです。

新聞：韓国日報、韓国経済新聞、朝鮮日報　等
雑誌：ヘラルド経済、シネ21、フィルム2.0　等
TV・ラジオ：KBSテレビ、MBCテレビ、ラジオCBS　等

## 6 韓国内における反響

上映会場となったメガボックスのホームページ（http://www.megabox.co.kr/）上の掲示板には、現時点で、本企画に関する約一五〇件の書き込みがなされていますが、上映作品に関する約六〇件の書き込みについては大部分が鑑賞した作品を支持する好意的な内容のものでした。また、同様の上映会を再度行って欲しいとの書き込みが一〇件ありました。

「日本映画：愛と青春 1965-1998」上映作品一覧

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 『あこがれ』 | 監督：恩地日出夫 | 1966年 |
| 2 | 『なつかしい風来坊』 | 監督：山田洋次 | 1966年 |
| 3 | 『めぐりあい』 | 監督：恩地日出夫 | 1968年 |
| 4 | 『兄貴の恋人』 | 監督：森谷司郎 | 1968年 |
| 5 | 『街に泉があった』 | 監督：浅野正雄 | 1968年 |
| 6 | 『喜劇　一発大必勝』 | 監督：山田洋次 | 1969年 |
| 7 | 『俺たちの荒野』 | 監督：出目昌伸 | 1969年 |
| 8 | 『やくざ絶唱』 | 監督：増村保造 | 1970年 |
| 9 | 『女子学園　悪い遊び』 | 監督：江崎実生 | 1970年 |
| 10 | 『高校生心中　純愛』 | 監督：帯盛迪彦 | 1971年 |
| 11 | 『喜劇　女は男のふるさとヨ』 | 監督：森崎東 | 1971年 |
| 12 | 『遊び』 | 監督：増村保造 | 1971年 |
| 13 | 『父ちゃんのポーが聞える』 | 監督：石田勝心 | 1971年 |
| 14 | 『制服の胸のここには』 | 監督：渡辺邦彦 | 1972年 |
| 15 | 『学生妻　しのび泣き』 | 監督：加藤彰 | 1972年 |
| 16 | 『涙のあとから微笑みが』 | 監督：市村泰一 | 1974年 |
| 17 | 『新幹線大爆破』 | 監督：佐藤純彌 | 1975年 |
| 18 | 『爆発！暴走遊戯』 | 監督：石井輝男 | 1976年 |
| 19 | 『さらば夏の光よ』 | 監督：山根成之 | 1976年 |
| 20 | 『突然、嵐のように』 | 監督：山根成之 | 1977年 |
| 21 | 『新宿乱れ街　いくまで待って』 | 監督：曾根中生 | 1977年 |
| 22 | 『さすらいの恋人　眩暈』 | 監督：小沼勝 | 1978年 |
| 23 | 『桃尻娘＜ピンク・ヒップ・ガール＞』 | 監督：小原宏裕 | 1978年 |
| 24 | 『帰らざる日々』 | 監督：藤田敏八 | 1978年 |
| 25 | 『ホワイト・ラブ』 | 監督：小谷承靖 | 1979年 |
| 26 | 『神様のくれた赤ん坊』 | 監督：前田陽一 | 1979年 |
| 27 | 『狂った果実』 | 監督：根岸吉太郎 | 1981年 |
| 28 | 『俺っちのウエディング』 | 監督：根岸吉太郎 | 1983年 |
| 29 | 『時をかける少女』 | 監督：大林宣彦 | 1983年 |
| 30 | 『みゆき』 | 監督：井筒和幸 | 1983年 |
| 31 | 『コータローまかりとおる！』 | 監督：鈴木則文 | 1984年 |
| 32 | 『恋人たちの時刻』 | 監督：澤井信一郎 | 1987年 |
| 33 | 『ウェルター』 | 監督：村上修 | 1987年 |
| 34 | 『私をスキーに連れてって』 | 監督：馬場康夫 | 1987年 |
| 35 | 『ラブ・ストーリーを君に』 | 監督：澤井信一郎 | 1988年 |
| 36 | 『SO WHAT』 | 監督：山川直人 | 1988年 |
| 37 | 『スキンレスナイト』 | 監督：望月六郎 | 1991年 |
| 38 | 『海鳴り』 | 監督：佐野和宏 | 1991年 |
| 39 | 『湾岸バッド・ボーイ・ブルー』 | 監督：富岡忠文 | 1992年 |
| 40 | 『トカレフ』 | 監督：阪本順治 | 1994年 |
| 41 | 『800 TWO LAP RUNNERS』 | 監督：廣木隆一 | 1994年 |
| 42 | 『愛の新世界　Le Nouveau Monde Amoureux』 | 監督：高橋伴明 | 1994年 |
| 43 | 『いちご同盟』 | 監督：鹿島勤 | 1997年 |
| 44 | 『がんばっていきまっしょい』 | 監督：磯村一路 | 1998年 |
| 45 | 『チルソクの夏』 | 監督：佐々部清 | 2003年 |
| 46 | 『ヴァイブレータ』 | 監督：廣木隆一 | 2003年 |

事例紹介

# 第二回国際文化フォーラム

## （座談会「日韓学生サミットin大阪」11月14日（日）国立国際美術館）（座談会「日韓若手芸術家・文化人会合」11月15日（月）NHK大阪放送局）

長官官房国際課

日韓両国の高校生、大学生が、日韓の高校生の交流と初恋を描いた映画『チルソクの夏』を観賞し、映画の感想とこれからの日韓の若者の交流、文化交流について語り合う座談会「日韓学生サミットin大阪」が国立国際美術館で、また、二〇〇四年一月の韓国における第四次日本文化開放および二〇〇五年の「日韓友情年二〇〇五」の実施を踏まえ、映画、現代演劇、文学、アニメ、マンガ、サブカルチャーなどの分野で活躍する日韓の若手・中堅の芸術家・文化人が一同に会する座談会「日韓若手芸術家・文化人会合」がNHK大阪放送局で開催された。

「日韓学生サミットin大阪」には、日本側から大阪市内の高校生四名と、韓国人家庭にホームステイしたことのある学生など大学生三名が、一方、韓国側から大阪市内の在日韓国人高校生三名と、韓国人留学生など大学生三名が参加した。司会進行・アドバイザーとして、大平光代・大阪市助役、劇作家の平田オリザ氏、寺脇研・文化庁文化部長が加わった。

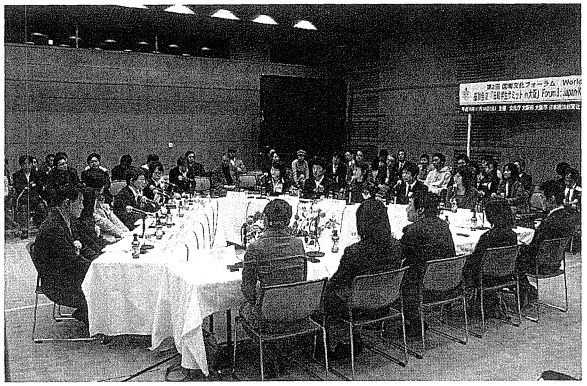
韓国側からは、「韓国人は日本に負けてはいけないという感情の中で生きているし、親の反対で日本人との結婚をあきらめた人もいる」と、反日感情が残っていることを指摘しつつも、その反面で、「日本に留学して良い体験をして、日本人一人一人には良い感情をもっている。お互いに友好を築ける関係にあり、相手をもっと知ることが大事だ」と述べた大学生がおり、個人のつながりから交流が広がる可能性を示した。

在日韓国人で大阪の市立高校にかよう生徒は「中学まで民族学校にかよっていたが、公立高校に入って友人たちに温かく迎えられ、友情や恋愛には国境がないと思えるようになった」と言う。

日本側からは、「討論して、韓国の歴史や自分の国のことへの勉強不足を痛感した。韓国と日本を国家レベルでつなぐために、互いの意識が友好に向くよう、対話することの大切さを強く感じた」と若者同士の交流に期待が示された。

学生たちの活発な議論を受けて、平田オリザ氏からは、「となりの国である韓国とは、これからも近所付き合いをしていくことになるが、相手のいやなことはしないことが大切である。そのためにもお互い最低限のことを知るために学ぶことが必要ではないか」と、相互理解の必要性を強調し、大平光代氏も日本の着物に対して韓国の人々がもつイメージと日本人のイメージの違いに驚いた経験を元に「相手を理解し、また、自分自身の考えを伝えることによって理解が深まる」として、隣国でありながらも文化の違いを認識し、付き合っていくことが大切だと述べた。

最後に寺脇部長は「日韓にとって不幸な二〇〇年の歴史を知らなければならないのは当然だが、半島から漢字をもたらしてくれるなど、恩恵を受けた両国の友好と長い歴史を知って、次の一〇〇〇年、二〇〇〇年に向けての交流を考えていく必要がある」と総括した。



日韓学生サミットin大阪

東住吉高等学校による長唄三味線の演奏

本座談会には、大阪市内の高校生や大学生、また、現在日本に留学している韓国人大学生など、一〇〇名近い傍聴者を集め、両国の学生たちの繰り広げる議論に耳を傾けた。

また、座談会終了後には、参加者、傍聴者を集めたレセプションが開催され、その中で大阪府立東住吉高校の生徒による長唄三味線が披露され、座談会に花を添えた。

翌日の、「日韓若手芸術家・文化人会合」は、寺脇文化部長による司会の下、日韓の文学、漫画、映画、アニメーション、現代演劇で活躍する中堅・若手の芸術家、研究者ら一二人が活発に意見を交換した。

劇作家の平田オリザ氏は「演劇の世界は市場規模が小さいだけにフットワークが軽く、すでに日韓での共同制作作品も評価を受けており、最先端の交流をしている」と現状を報告した。韓国の劇団旅行者代表の梁正雄（ヤン・ジョンウン）氏も「公演は海外中心になっており、実際に日本の劇団との合同公演も模索している」と演劇の交流が進んでいることを明らかにした。

アニメーション監督の原恵一氏は、アニメーション分野の交流について、「日本と韓国のかかわりは意外と古く、日本のアニメーションの仕事の一部を韓国のスタジオが引き受けている」と報告、韓国のアニメーションプロデューサー李正鎬（イ・ジョンホ）氏は「アニメーション産業は未来産業であり、いろいろな文化を導く触媒となっている。今後は日韓に中国を含めた共同制作についても模索していきたい」と、新たな交流の可能性を語った。

映画監督の阪本順治氏は、日本と韓国の映

日韓若手芸術家・文化人会合

画の違いについて、「日本は、監督の個性を出した作品作りによって、日本映画がバラエティーに富んだものになっている。一方、韓国の作品は、芸術性、自国の社会性、商品性を大事にした中で、力強いものが生まれている」と分析をした。

観客のニーズをとらえた市場志向の作品づくりで急激に成長した韓国映画をリードする張允炫（チャン・ユンヒョン）監督は「米国の具体的圧力の前で、積極的に攻勢に出るために、日本との違いを挙げるより、共通性を見いだし協調していきたい」と発言し、日本の小説家の赤坂真理氏も「隣国同士の争いのために違いが強調されすぎたが、韓流ブームで近づくきっかけができると案外近い文化だったことに気付く。境界を超える力はあるはず」と両国の協力の可能性に期待を表した。

日韓若手芸術家・文化人会合　日本側参加者

韓国側参加者

韓国の作家で中央大学校芸術大学院講師の全成太（ジョン・ソンテ）氏は、西洋画と東洋画の美的感覚の違いを示しながら、「これまで韓国や日本では、外国文学というと西洋の文学であったが、最近東洋的なものに対する認識が広がってきている」と指摘し、東洋的な特徴をもつ文化を日韓が共同して世界に発信する必要性を語った。

漫画家の江川達也氏は「日韓で共同して創作活動をするときに、西洋的な文化を接着剤としてつながるのではなく、東洋的な心の共通性を求めなければならない」との意見を述べ、韓国の漫画家の尹胎鎬（ユン・テホ）氏は「差があることから文化に興味がわく側面もあり、違いを認めたうえで同一性を探る方法もある」と語った。

社会学者の宮台真司東京都立大学助教授は、「日本と韓国の間にも、抽象的なわかり合いではなく、お互いがお互いの存在を前提にしているという現状をよく理解し、より緊密で高いレベルのコミュニケーションを築き上げていくことが必要」と発言、文化を経済的に分析する金炯鍾（キム・ヒュジュン）秋渓芸術大学校文化産業大学院長は「韓国、日本に中国を加えれば、米国、ヨーロッパに対抗する三番目のアジアの市場を形成できる。交流の障害となる過去の話は歴史家の手に委ね、具体的な交流を考えていく必要がある」と指摘した。

最後に寺脇文化庁文化部長が「文化交流のもつさまざまな側面を共存させながら、それぞれの分野での人的交流や、若手・留学生交流など、恒常的な交流を進めていくことが、お互いの共通認識を深めるためにも必要である」とまとめた。

二つの座談会とも、日韓の新しい文化交流の方向性を打ち出すとともに、二〇〇五年の日韓友情年へ大きな関心と期待を向けるきっかけとなった。なお、一一月一五日の座談会の模様は、二〇〇五年二月にNHK衛星第2放送の番組で紹介されることになっている。



取組紹介

# 2004・2005年の日韓文化交流への文化庁の取組

長官官房国際課

文化庁では，2004年１月の韓国における日本大衆文化第４次開放，2005年の日韓友情年の実施を踏まえ，お互いの文化芸術を紹介し合う交流だけでなく，両国の文化関係団体，芸術家，クリエーター，プロデューサーを引き合わせ，「共創」による作品制作や人材育成の協力を引き出す呼び水となるような交流事業を展開しています。

## ＜2004年実施事業＞

●韓国インディペンデント映画2004　3月6日～12日：東京（シアター・イメージフォーラム）
●日韓芸能交流公演　スーパー神楽とコリアン・ファンタジー　4月9日・10日：東京（国立劇場）
●日本映画：愛と青春1965-1998　11月11日～24日：韓国・ソウル（COEXメガボックス）
●第２回国際文化フォーラム
対談「映画と映画祭－これまでとこれから」　10月26日：東京（オリベホール）
・東京国際映画祭の審査委員長と審査委員を務めた山田洋次映画監督と李滄東（イ・チャンドン）韓国映画監督による日韓映画についての対談を実施。
座談会「日韓学生サミットin大阪」　11月14日：大阪（国立国際美術館）
座談会「日韓若手芸術家・文化人会合」　11月15日：大阪（NHK大阪放送局）
対談「日韓文化交流の未来」　11月17日：ソウル（メガボックス）
・河合文化庁長官と李滄東（イ・チャンドン）韓国映画監督による日韓文化交流の未来について対談を実施。

## ＜2005年実施予定事業＞

●文楽とパンソリの交流（韓国公演・日本公演）
1月29日・30日韓国・ソウル（韓国国立国楽院）
3月3日・4日：東京（国立劇場）
・2003年にともにユネスコの「人類の口承と無形遺産に関する傑作の宣言」を受けた文楽とパンソリの交流公演を日韓両国において実施。
●第８回文化庁メディア芸術祭
韓国メディア芸術作品展　2月25日～3月6日東京（東京都写真美術館）
・メディア芸術祭「受賞作品展」と併設で，韓国メディア芸術作品を特集展示。
●韓国インディペンデント映画2005
3月（予定）：東京（シアター・イメージフォーラム（予定））
・日韓両国の文化交流と相互理解を深めるため，韓国の独立映画等を特集した映画祭を計画。
●日韓芸術大学交流展（仮称）
8月25日から２週間程度，韓国・ソウル（芸術の殿堂美術館）
12月初旬から２週間程度，東京芸術大学美術館
・芸術大学関係者の作品を中心に，双方の芸術大学による美術交流展を両国で実施。

## ●2月号予告


◆長官対談◆
【文化人の本音】河合隼雄文化庁長官対談
ドナルド・リチー　映画史家
【長官コラム 文化庁の抜穴】

◆特集◆
**日本文化の総合的な発信機能の強化**
【文化庁提言】
国際文化交流政策の総合的な推進に向けて
【寄稿】
文化の多様性と日本文化……イ・オリョン
……山折哲雄
……海老澤敏
……高階秀爾
【事例紹介】
国際文化フォーラム
文化庁文化交流使の活動

◆文化庁ニュース◆
平成一六年度春・秋の叙勲褒章受章者　ほか

◆連載◆
【いきいきミュージアム～美術館・博物館事業レポート～】
大阪府立弥生文化博物館
【芸術文化の活動風景】
ピアノの調律
【そうかこうすればいいんだ！著作権教育実践事例】
ＩＴを活用した授業のための著作権教育
【文化交流使の活動報告】
落語家・笑福亭鶴笑
【伝建地区を見守る人々―伝建歳時記―】
城下町のおひなさん
【遺跡を楽しむ】
みんなでつくる「みんなの遺跡公園」
【文化庁の地域文化振興施策】
本物の舞台芸術体験事業
【国語研究の最先端】
e-japan
【風を呼ぼう、わが町に―登録文化財との歩み―】
「思い出ふれあい事業」の展開　文化財の活用と高齢者ケア
【文化力ニュース from 関西】
ミュージアムぐるっとパス・関西２００５
【国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法】
仏画（仏教絵画）の線描
【日本の伝統美と技を守る人々】
左官（日本壁）・全国文化財壁技術保存会


## 編集後記

今年は「日韓友情年」、日韓基本条約が締結されて四〇周年という節目の年です。両国にはこれまでに抱えてきたさまざまな背景はありますが、それはひとえに両国のことを真に理解するきっかけがなかったことが要因だったのではないかと思います。

昨年は、「冬ソナ」ブームが社会を席巻しました。この現象を一時的な社会現象ととらえる方々もいらっしゃるかもしれませんが、社会現象は一つのきっかけを与えるものであり、それをどのように活かしていくか、それは社会現象の中にいる一人一人の意識にあるのではないでしょうか。

「継続は力なり」という言葉にもあるとおり、今回のブームが一過性のものに止まらず、真の「力」となって、本年の日韓友情年をきっかけに韓国と「近くて近い国」になることを切に期待しています。

（ＨＨ）

文化庁では，ホームページで，文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見，文化庁月報の感想などを，ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●
http://www.bunka.go.jp


# 文化庁月報　1月号（通巻436）

平成17年1月25日印刷・発行

編集――文化庁
〒100-8959　東京都千代田区丸の内2-5-1
発行――株式会社 ぎょうせい
本社　〒104-0061　東京都中央区銀座7-4-12
本部　〒167-8088　東京都杉並区荻窪4-30-16
電話　編集　03（3571）2126
販売　03（5349）6666
URL：http://www.gyosei.co.jp
印刷所―ぎょうせいデジタル株式会社



●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。



定価540円　本体514円　送料76円
年間購読料6,480円
本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社，あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
（株）ぎょうせい営業部広告課
電話03（5349）6657（ダイヤルイン）


ⓒ2005 Printed in Japan


ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。